

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第五回 祖先祭祀

南出喜久治 (令和6年11月1日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

【祖先祭祀】

「遺体」といふ言葉があります。これは、本来は「死体」(なきがら)を意味するのではなく、祖先から連綿として命と魂を受け継いだ自己の「身体」(わがみ)のことです。人は、祖先の命と魂の受け皿である「遺体」と、家族の生活基盤として維持されてきた家産(身代)を受け継ぎます。この家産を「遺産」と言ひます。つまり、人は、「遺体」と「遺産」を祖先から受け継ぎ、そしてそれを子孫に受け継がせて行きます。これが国家の祖型としての「家族」のあり方なのです。人には、それぞれ両親があり、その両親にもそれぞれに両親(祖父母)があり、その祖父母にもそれぞれ両親(曾祖父母)があり、それを連綿と僅か26代まで遡っただけでも、祖先の総数は1億3421万7726柱となり、現在の我が国総人口を超えます。これほどまで多くの命と魂を受け継いで今があるといふ現実があり、祭祀は虚構ではないのです。

ルース・フルトン・ベネディクトの『菊と刀』といふ著作があります。敵国である我が国の文化を批判的に行つた日本文化論ですが、我が国の文化を恥の文化とし、欧米の罪の文化と我が国の恥の文化を比較し、宗教に根差す欧米の罪の文化は、倫理的に優れてゐるとするものです。

恥の文化とは、他人や世間との関係において、相対的な空気を意識するものであるとしますが、このやうな結論は、日本に一度も訪れたことなく、実際に日本での生活をして得られた経験論ではなく、単なる観念論に過ぎません。

罪の文化とは、Godの存在を認め、人間の原罪を意識することから組み立てられた虚構であり、現実の祖先と向き合つた意識ではありません。

つまり、罪の文化とは宗教の文化であり、恥の文化とは祭祀の文化なのです。

恥といふのは、世間体を意識した相対的なものではありません。「恭儉己レヲ持シ」て自らの心に問ひ、自己の行動を祖先が非と評価することを「恥」とすることです。世間が

批判するから恥と感ずるのではなく、祖先のうけひ（誓約）による結論なのです。

ご先祖様に申し訳ない。ご先祖様に顔向けができない。といふ意識なのです。

「恥を知れ」と言はれることはありますが、「罪を知れ」とは誰も言ひません。

また、世間からの嘲笑や侮辱は、時には祖先の恥辱となることもあり、これを放置することはできません。受けた恩と仇は必ず返せといふのも、祖先の意志なのです。

このやうに、祖先祭祀は、祖先との対話から始まります。これは、人間の本能的な発露であり、祖霊が存在するために神人共食の祭祀がなされるのは、自然な営みなのです。